

芸術科

事例 1 創造的な鑑賞活動の工夫

～ 音楽 I における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて ～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 124

事例 2 ポスターの構想・設計から生徒の思考力を高める

～ 美術における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた工夫 ～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 134

事例 3 深い学びを目指した臨書学習

～ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた工夫 ～
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 144

研究協力委員

栃木県立宇都宮東高等学校	教諭	山 崎 恵
栃木県立栃木女子高等学校	教諭	森 戸 重 臣
栃木県立宇都宮中央女子高等学校	教諭	五月女 章 子

研究委員

栃木県総合教育センター研究調査部	副主幹	岩 瀬 英二郎
------------------	-----	---------

○芸術科における「主体的・対話的で深い学び」

高等学校学習指導要領（平成21年）において、芸術科の目標は次のように定められている。

芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、芸術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

このような教科の特質から、芸術科においては従来から「活動」を重視してきており、他教科と比べると、いわゆる「アクティブ・ラーニング」を行うための素地はできていた。

しかし、生徒が「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」をしているかという視点で、これまでの授業を見つめ直してみると、改善の余地が見つかるのではないだろうか。

例えば、

- ・表現の領域で、生徒に創意工夫の場を十分に与えることなく、技術指導に偏ってはいないだろうか
- ・創作をする場面で、生徒同士が議論しながら、協働して課題に向き合うような機会を与えてきただろうか
- ・鑑賞の領域で、十分に「（音楽的な・造形的な・書に関する）見方・考え方」を働かせて、深い理解をともなうように工夫してきただろうか

などである。これらの視点から授業改善をしていくことは、芸術科においても他の教科と同様に重要なことであろう。

今回の研究では、音楽・美術・書道における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を目指して、次のような実践を行った。

事例 1 では、音楽Ⅰにおいて、組曲『惑星』（ホルスト作曲）を題材にして、鑑賞の学習の中にリコーダー・アンサンブルやグループでの話し合い活動を組み込んで、音楽を形づくっている要素の知覚と音楽的な感受に基づいた創造的な学びを目指した。

事例 2 では、美術Ⅰにおいて、架空の商品「ミルククッキー」をPRするポスターの制作を題材にして、デザイン表現の中で個人のアイデアを持ち寄り、それを生徒同士の話し合いを通してグループでの創作につなげていく学びを目指した。

事例 3 では、書道Ⅰにおいて、『風信帖』（空海）を題材にして、臨書の学習の中で、筆遣いや書風などについての話し合いをグループで行い、感性を働かせて試行錯誤をしながら、法帖を深く見つめ、用筆を意識して作品を作り上げる学びを目指した。

これらの事例を今後の授業改善の参考にしていただきたい。

事例 1 創造的な鑑賞活動の工夫 ～ 音楽Ⅰにおける「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて ～	
題材名	オーケストラの豊かな響きを味わおう 組曲『惑星』（ホルスト作曲）による
これまでの課題	音楽Ⅰは、「表現（歌唱・器楽・創作）」及び「鑑賞」の二つの領域の幅広い活動を通して、生涯にわたる豊かな音楽活動の基となる「創造的な表現と鑑賞の能力」を伸ばすことをねらいの一つとしており、これまでも「音楽的な感受」を基盤とした創造的な活動を実践してきた。表現領域の学習においては、生徒が楽しみながら「思いや意図をもって」生き生きと表現活動に取り組む姿が見られ、生徒の創造的な表現能力の高まりを感じることができた。その一方で、鑑賞領域の学習においては、様々なアプローチから生徒の楽曲への理解を深め、学習意欲の高まりについては十分に感じることが出来るものの、どうしても個人での鑑賞活動に重点が置かれてしまうために、「根拠をもって批評する」という活動で表現される創造的な鑑賞の能力については、伸長を実感しにくい状況となってしまう。
授業改善のポイント	本事例は、鑑賞領域の学習の導入に、リコーダー・アンサンブルによる表現活動を位置付けることで、題材となる楽曲への感情やイメージを自覚させ、よさや美しさを見いださせている。その上で、学習のねらいを明確にすることで見通しをもたせて「主体的な学び」の実現を目指す。また、従来は個人で取り組むことが多かった鑑賞活動に、グループ学習を取り入れることで「対話的な学び」を生み出し、一人一人が「音楽的な見方・考え方」を働かせて「知覚・感受」したことを言葉や音楽で伝え合い、他者と共有・共感したりできる場面を設定することで、より主体的にその楽曲と関わる力を養い「深い学び」の実現へとつなげることを目指している。

1 指導観

(1) 題材について（教材観）

20世紀の管弦楽曲の中でも、最も知られている作品の一つであるホルスト作曲の組曲『惑星』の第4曲《木星》は、印象的な主題が次から次へと現われ、聴く者を大いに楽しませてくれる。とりわけ中間部に現れる主題は美しく、様々な形で学校音楽教育に取り上げられている。この親しみやすい曲を教材に、オーケストラの豊かな響きを味わわせるとともに、表現の領域と鑑賞の領域を関連付けた授業を行いたいと考えこの題材を設定した。

本事例は、現行の高等学校学習指導要領（平成21年告示）の内容、A表現（2）器楽のうち、「ア 曲想を楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、イメージをもって演奏すること。」「エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して演奏すること。」及びB鑑賞のうち、「ア 声や楽器の音色の特徴と表現上の効果とのかかわりを感じ取って鑑賞すること。」「イ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して鑑賞すること。」に基づいている。

芸術科（音楽）において、現行学習指導要領解説に改善の基本方針として示された「思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力」及び「根拠をもって自分なりに批評することのできるような力」の育成も踏まえながら、次期学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した学習のプロセスを模索するものである。

(2) 生徒の実態（生徒観）

本校の生徒は、全体的に極めて真面目であり、何事にも興味・関心をもち、熱心に取り組むことが多い。表現活動においては、歌唱・器楽・創作ともに技術が高い。その一方で、やや積極性に欠ける部分があり、創造的な表現にも物足りなさを感じることもある。音楽的な基礎能力（ソルフェージュ力）は平均的に高く、特に読譜力や視唱・視奏力において優れている生徒が多い。

(3) 生徒に身に付けさせる力（育成を目指す資質・能力）

ア 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受し、オーケストラの豊かな響きを楽器の音色の特徴や表現上の効果と関連付けて理解する力。

イ オーケストラの豊かな響きを味わいながら、楽曲に対する理解を深め、よさや美しさという音楽の魅力を言葉で伝え合うことができる力。

2 題材の指導計画及び評価計画

○題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
①各声部の役割と曲想との関わりに関心をもち、イメージをもって演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。 ②オーケストラの様々な楽器の音色、各楽器群の響きに関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。 ③組曲『惑星』の各曲に対する理解を深めて、よさや美しさを伝えることに主体的に取り組もうとしている。	①各声部の役割を生かした音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて表現意図をもっている。 ②音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら、曲想をオーケストラの響きと関連させて感じ取り、どのように演奏するかについて表現意図をもっている。	①各声部の役割を感じ取り、イメージをもって音楽表現をするために必要な技能を身に付け、創造的に表している。	①音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら、楽曲のよさや美しさを理解して聴いている。 ②組曲『惑星』の各曲に対する理解を深めて、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。 ③音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら、オーケストラの楽器の音色の特徴や表現上の効果を理解して聴いている。

○題材の指導計画と評価計画（総時数10時間）

時	学 習 内 容	評価の観点				評 価 規 準	評価方法
		関	創	技	鑑		
1 ・ 2	○《木星》のリコーダー三重奏を声部の役割を考えながら、イメージをもって演奏する。	①				○各声部の役割と曲想との関わりに関心を持ち、イメージをもって演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。	行動観察
			①			○各声部の役割を生かした音楽表現を工夫し、どのように演奏するかについて表現意図をもっている。	行動観察 演奏
	○《木星》の原曲を聴き、曲想にあった表現を工夫し、イメージをもって演奏する。 (主体的な学び)			①		○各声部の役割を感じ取り、イメージをもって音楽表現をするために必要な技能を身に付け、創造的に表している。	行動観察 演奏
3	○『青少年のための管弦楽入門』を聴き、オーケストラを構成する楽器の音域や音色の特徴を理解し、各楽器群の響きを味わう。 (対話的な学び)	②				○オーケストラの様々な楽器の音色、各楽器群の響きに関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	行動観察 ワークシート①
4 ・ 5 (本時)	○オーケストラの多彩な響きと表現との関わりを感じ取り、《木星》の特徴を理解して楽曲のよさや美しさを味わう。 ・冒頭部分、第4主題を分析する。 ・リコーダー・アンサンブルの表現を工夫する。 ・《木星》のよさや美しさを伝えるプレゼンテーションをする。 (対話的な学び)		②			○音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら、曲想をオーケストラの響きと関わらせて感じ取り、どのように演奏するかについて表現意図をもっている。	行動観察 演奏 ワークシート②
					①	○音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら、楽曲のよさや美しさを理解して聴いている。	行動観察 ワークシート②
6 ・ 7	○作曲者、楽曲の背景を知り、組曲『惑星』を鑑賞し、各曲を分析する。 ○各自が1曲選択し、グループ内で曲の魅力を伝え合うプレゼンテーションをする。 (対話的な学び)				②	○組曲『惑星』の各曲に対する理解を深めて、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。	行動観察 ワークシート③
8 ・ 9	○各グループが選択した曲をオーケストラの楽器の音色の特徴や表現上の効果と関連付けながら分析し、よさや美しさを伝えるプレゼンテーションを考える。 (深い学び)				③	○音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら、オーケストラの楽器の音色の特徴や表現上の効果を理解して聴いている。	行動観察 ワークシート
10	○各グループによるプレゼンテーションを行い、組曲『惑星』の魅力を言葉で伝え合う。 (深い学び)	③				○組曲『惑星』の各曲に対する理解を深めて、よさや美しさを伝えることに主体的に取り組もうとしている。	行動観察 ワークシート

3 本時の展開 (10時間のうちの5時間目)

段階	学習活動	指導上の留意点	評価規準 (方法)
導入 10分	1 《木星》のリコーダー・アンサンブルを演奏する。 2 本時の学習内容を知る。	・ウォーミングアップをかねて行う。 ・中間部（第4主題）の表現上の効果について学び、曲のよさや美しさについて考えることを理解させる。	
展開 30分	3 前時の復習をする。 ・《木星》の中間部までの部分を聴く。 4 第4主題の音楽的特徴を分析する。 ・第4主題の部分だけを聴く。 ・【譜例2】も参考にしながら音域・楽器・強弱の三つのポイントについてまとめる。 ・グループで確認し、実際にリコーダーで演奏してみる。 5 《木星》のよさを紹介する文を書いてグループ内でプレゼンテーションを行う。 (対話的な学び)	・ワークシート②で確認させる。確認2の1 (3) ②まで ・5音音階については、長音階と短音階の違いを強調して確認する。 ・3回繰り返されるたびに变化していく諸要素の働きに気付かせるようにする。 ・主題を演奏している楽器の響きに注目させるようにする。 ・リコーダーで演奏させることにより、感じ取ったことを共有させる。 ・本時までの学習内容を振り返りながら紹介文を書かせるようにする。 ・発表し合うことで、他者と意見を共有したり、共感したりできることに気付かせる。	○音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら、曲想をオーケストラの響きと関わらせて感じ取り、どのように演奏するかについて表現意図をもっている。 【音楽表現の創意・工夫】 (行動観察) (演奏) (ワークシート②) ○音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら、楽曲のよさや美しさを理解して聴いている。 【鑑賞の能力】 (行動観察) (ワークシート②)
まとめ 10分	6 本時のまとめをする。 ・《木星》のアンサンブルを演奏する。 ・次時の学習内容を知る。	・本時の分析を生かした表現の工夫を話し合わせてから演奏させる。 ・次回は『惑星』の他の曲を取り上げてプレゼンテーションを行うことを伝える。	
備考	この指導案における【譜例2】は《木星》のオーケストラ・スコアをプリントしたものである。中間部、第4主題が現れる少し手前の183小節目から233小節目までの部分を全員に配付しておく。		

4 実践の様子

(1) 生徒の取組

ア リコーダー・アンサンブル (主体的な学びの視点)

題材の導入に《木星》の中間部の主題(第4主題)によるリコーダー三重奏曲(SR・AR1・AR2)に取り組ませた。第4主題を中心に構成されたシンプルな作品で、比較的容易にアンサンブルを楽しめる。これまでも学習への動機付けとして鑑賞の学習にも取り入れてきた。今回は、「主体的な学び」の視点から音楽によって喚起されるイメージや感情を自覚させ、次の《木星》の音楽的特徴を分析する学習への見通しをもたせることを主なねらいとし、更なる充実を図った。

第1時は、個々の生徒が既存の《木星》へのイメージをもって譜読みを進めた。ほとんどのグループで、《音楽的な感受》を通して各声部の役割を考えながら、主体的に取り組むことができていた。授業の終盤には、表現の工夫に取り組むグループも現れて、アンサンブルへの意欲だけでなく、原曲への興味・関心の高まりが伝わってきた。題材の導入としては十分な成果があった。

第2時は、まず、各声部の役割を考えながら、できるだけ担当するパートだけでなく、他のパートと聴き合いながらアンサンブルをするようアドバイスした。演奏がまとまってきたところで原曲を鑑賞し、曲想にふさわしい表現について話し合ってから、グループごとに演奏発表をするようにした。短い作品だが各グループの表現意図が伝わってくる発表が多くあり、十分に演奏を楽しめた様子が見られた。ここで、演奏の完成度が重要なのではなく、一人一人が「音楽的な見方・考え方」を働かせて、アンサンブルで表現をしたり、原曲を聴いたりする過程において、気付いたことや感じたことをこれからの学習に生かしていくことが大切であることを伝えた。

イ 『青少年のための管弦楽入門』(ブリテン作曲)を聴く。(対話的な学びの視点)

第3時は、『青少年のための管弦楽入門』(ブリテン作曲)を聴いた。この曲はイギリス政府が制作した教育用映画の管弦楽解説用フィルム「管弦楽の楽器」のために書かれたオーケストラの入門曲である。パーセルの主題による変奏曲とフーガからなる大編成の管弦楽曲で、変奏曲の各変奏をオーケストラの様々な楽器が独奏する。この曲を教材にオーケストラを構成する楽器の音域や音色の特徴、各楽器群の響きについて学習した。

本事例では「対話的な学び」の視点をもって、グループで鑑賞学習を進めていった。リコーダーのグループをそのまま活用し、3人あるいは4人での学習とした。ワークシート①(図1)はいつものように各自で記入させたが、鑑賞しながら疑問をすぐに解決できるよう、またお互いに気付いたことや感じたことを共有できるように、グループ内での会話を促した。最初のうちは鑑賞中に声を出すことに戸惑いを見せていたが、すぐに慣れて、こちらからの問いかけにもグループで意見を交わしながら答えるなど、活気のある授業となり、オーケストラの豊かな響きを味わいながら実感を伴って理解することができた。

[具体的な指導手順]

- ①楽器群の各楽器名を確認する。
- ②主題提示部分を(約4分)聴き、各楽器群の楽器名と響きを確認する。
- ③変奏部分(約10分)を聴き、各楽器の個々の響き確認する。
- ④フーガ部分を聴き、管弦楽全体の響きを確認する。

オーケストラの豊かな響きを感じ取ろう①

みなさんが練習しているリコーダー三重奏 ♪Jupiter木星♪の原曲は、1914年～1917年にかけて、イギリスの作曲家ホルストが作曲した管弦楽組曲『惑星』の中の第4曲、『Jupiter木星』です。それでは、原曲を聴いてみる前にオーケストラについて確認してみよう。

確認1 オーケストラは楽器のグループの集まりです。思い出してみよう。

確認2 ホルストと同じイギリスの作曲家の作品で、それぞれの楽器のグループの響きを聴いてみましょう。

曲名	青少年のための管弦楽入門 ～パーセルの主題による変奏曲とフーガ
作曲家	ベンジャミン・ブリテン (1913～1976) 英
演奏者	ベンジャミン・ブリテン 指揮 ロンドン交響楽団 小澤征爾 (指揮とナレーション) ポストン交響楽団

(1)【主題の提示】の部分を聴いてみよう。

パーセルの主題



最初に主題がオーケストラ全体で演奏されます。それから4つの楽器のグループがそれぞれ演奏します。どんな響きがするの聴いてみましょう。

	演奏している楽器	響き(音色)について	主題の雰囲気
	オーケストラ全体 Tutti(トゥッティ)		
木管楽器			
金管楽器			
弦楽器			
打楽器			
	オーケストラ全体		

(2)【変奏】の部分を聴いてみよう。

主題の提示に続いてオーケストラの各楽器で変奏されます。どのような順で変奏されているか、CDを聴きながら確認してみましょう。

順	変奏している楽器	順	変奏している楽器
1	フルート と ピッコロ	11	トランペット
2		12	と チューバ
3		13	打楽器
4			・ティンパニ
5	ヴァイオリン		・大太鼓 と
6			・ と
7			・ と ウッドブロック
8			・ シロフォン (木琴)
9			・ と タムタム (銅鑼)
10			・

(3)最後に【フーガ】の部分を聴いてみよう。

まずピッコロで演奏される＜ブリテンオリジナルの主題＞が、変奏部分と同じ順で次々と登場します。最後に金管楽器が＜パーセルの主題＞を演奏するとそれまでの楽器は＜ブリテンオリジナルの主題＞の演奏を続けているので、【二重フーガ】となります。

ブリテンの主題



(4)まとめ オーケストラの楽器についてどのくらい理解できたかな。自己評価してみましょう。(～が気がする。)

オーケストラの楽器について

- A 音を聴いて何の楽器がほぼわかるようになった。
- B 楽器名はわかるようになったが、音はあまりわからない。
- C 楽器名も音もあまりわからない。
- D さっぱりわからない。

図1 ワークシート① (第3時で使用)

ウ 《木星》のよさや美しさを味わう。(対話的な学びの視点)

第4・5時は、《木星》の冒頭部分と中間部の第4主題について、音楽の特徴をオーケストラの響きと関連付けながら分析した。また、楽曲分析から学んだことを基に、リコーダー・アンサンブルの表現の工夫にも取り組ませた。まとめに《木星》のよさや美しさを伝え合うプレゼンテーションをグループ内で行い、組曲『惑星』全体への興味・関心を高める展開とした。ワークシート②(図2)では、プレゼンテーションを効果的に行えるよう、曲のよさをまとめる欄と友達の意見を記入する欄を設けた。学習は全て前時までと同様にグループ活動で進めた。

第4時ではワークシート②に沿って、前時の学習事項の復習(確認1)を行い、本時の学習の導入(確認2)へと入った。ここで、各グループに組曲『惑星』全曲のオーケストラ・スコアを1冊ずつ渡して、《木星》に使われている楽器を確認できるようにした。従来は、スコアの1ページ目だけを各自に配付して個人で確認させていたが、《木星》は楽器編成が大きいいため、スコアを見ることにつまずく生徒も少なくなかった。今回は、学習形態をグループにしたことで、短時間のうちに確実に確認していた。前時の学習を基に本時の学習への見通しをうまくもたせることができ、次の楽曲分析への興味・関心を高めることもできた。

曲の冒頭部分の分析もスコアで客観的に確認しながら、グループで互いの考えを比較することによって、「音楽を形づくっている要素を知覚すること」が的確にできていたことがワークシートの記述から確認することができた。第4主題における五音音階の使用についての学習では、リコーダーで繰り返し演奏してきたことが効果的だった。最後に、ここまでの学習を生かして、アンサンブルの表現について更に考え・話し合う時間を設けた上で、全体で《木星》のリコーダー・アンサンブルを行ってこの時間のまとめとした。

オーケストラの豊かな響きを感じ取ろう②

みなさんが練習しているリコーダー三重奏 ♪Jupiter木星♪の原曲は、1914年～1917年にかけて、イギリスの作曲家ホルストが作曲した管弦楽組曲『惑星』の中の第4曲、『Jupiter 木星』です。それでは、原曲を聴いてみます。

確認1 オーケストラはいくつかの楽器のグループ（楽器群）の集まりです。整理してみよう。

楽器のグループ名	主 な 楽 器
楽器	
楽器	
楽器	
楽器	

確認2 この曲は通常よりも大規模なオーケストラで演奏されています。実際に使われている楽器をスコアで確認してみよう。

1 それでは、「Jupiter木星」を聴いてみます。

(1) あの有名な旋律にあなたは、どんなイメージを持っていますか。

(2) 次に、聴衆を一緒に『惑星』の世界に引き込んでくれる冒頭部分。その秘密を探ってみましょう。

① この部分を分析してみましょう。

参考 音色 リズム 速度 旋律 テクスチャ 強弱 構成 形式

音楽の特徴

曲の雰囲気や感じたことなど

② バイオリンの音型を見てみよう。【語例1】

③ それでは実際に聴いてみましょう。

(3) 次にリコーダーで吹いている部分について調べてみます。

楽譜には中間部よりとなっていますが、第4主題になります。では、第4主題が現われたら手をあげてください。【語例2】

① 第4主題で活躍していた楽器を ひとつだけ あげるとしたらどの楽器ですか。

② この主題は、() 音階 とよばれる少し特別な音階でできています。一般的な長調・短調の音階と何が違っていますか。

③ この主題は 3回 繰り返されます。この部分の音楽の特徴を次の3つのポイントについてまとめてみましょう。【語例2】

音域
楽器
強弱

2 それでは、今まで分析したこともとに「Jupiter木星」の良さを紹介してみよう。実際にグループでプレゼンしよう。
【曲の良さ】

3 友達のプレゼンからわかったことを書こう。

図2 ワークシート② (第4・5時で使用)

第5時(本時)には、初めにリコーダー・アンサンブルを行い、これまでの学習を想起させた。前時(第4時)の取組によって《木星》への音楽的理解が深まり、第4主題へのイメージがより豊かになっていることが伝わってきた。復習に五音音階、主題を演奏している楽器について確認し、第4主題の表現上の特徴を音楽的な感受を基に整理させた。ワークシートに記入されたものは、十分に満足できるものが多かったが、確認のためにいくつかのグループの代表に発表させた。ここで感じ取ったことを共有するために再度アンサンブルを行った。授業開始時のものと比較するとまさに創造的な表現への意欲の高まりが感じられる演奏だった。ここで、これまでに《木星》を聴いたりアンサンブルで表現したりする学習の過程で、生徒がグループを中心に言葉や音楽で伝え合い、共有・共感することによって理解を深めてきたこの作品の音楽的な特徴を整理し、根拠をもって批評するという次の創造的な鑑賞の学習へつなげることができた。第4・5時の2時間のまとめとして《木星》のよさを伝える紹介文を各自で書き、その文による簡単なプレゼンテーションをグループ内で行うことにした。どのグループも和やかな雰囲気、互いの発表を聴き合っていた。短い時間しか設けることができなかったが、《木星》のよさを言葉で伝え合っている様子を見て取ることができた。

今回の取組では、鑑賞領域の授業の中で、一斉型の授業(図3)だけでなく、グループでの話し合い(図4)やアンサンブル(図5)を実施してみた。提出されたワークシートの記述からも、オーケストラの響きと音楽的な感受を関連付けて捉えた曲のよさや美しさが表現されており、十分な学習の成果があったことがわかる(図6)。



図3 一斉型の授業



図4 グループでの話し合い



図5 アンサンブルの様子

2 それでは、今まで分析したこととに「Jupiter木星」の良さを紹介してみよう。実際にグループでプレゼンしよう。

【曲の良さ】

冒頭部分はヴァイオリンの細かく同じようなリズムが繰り返され、その後ホルンなどの音が入ることによって和音的に星の中にある木星が想像できると思います。第四主題は音域が低く、ゆっくりとしたメロディーは音域が高く、強くなるにつれ、雄大な宇宙のようさが伝わってきます。

3 友達のプレゼンからわかったことを書こう。

・その場所の雰囲気によって強弱や使われる楽器が異なる
・同じの楽器によって広大な感じがする
・五音階で親しみやすい
・小さいところから「バザー」と入っていくのがいい。

2 それでは、今まで分析したこととに「Jupiter木星」の良さを紹介してみよう。実際にグループでプレゼンしよう。

【曲の良さ】

初めはヴァイオリンの神秘的なメロディーです。楽器が増えていき、引合がはっきり星が描ける情景が思い浮かびます。第四主題は、どっしりとしたメロディーは音域が高く、強くなるにつれ、雄大な宇宙のようさが伝わってきます。

3 友達のプレゼンからわかったことを書こう。

主題ごとに曲の感じが変えてそれが面白いという意見が自分では思いつけなかった、聞いて良かった。
主題のメロディーが感動的。
楽器が99回は新鮮な意見が99回ある。

図6 ワークシート②の記述例（生徒が記入したもの）

エ プレゼンテーションをする。（対話的な学びで深い学びに）

第6・7時では、組曲『惑星』全曲の鑑賞を行った。《木星》を除いても約40分の作品のため2単位時間に分けて聴かせた。

第6時はまず、作曲者ホルストと楽曲の背景について説明した後、各曲のさびの部分（聴かせどころ）だけを聴くようにした。グループ活動にもすっかり慣れてきたので、主体的にいろいろな意見が出されていた。疑問等が解決され、徐々に静かになり鑑賞する雰囲気ができてきたところで、『惑星』についての資料を配付し、スコアとともに必要に応じて参考にと、鑑賞中でも会話をしてもよいことを伝えた。ここで鑑賞後のプレゼンテーションについても説明をし、全曲の鑑賞に入った。

ワークシートに各曲の「音楽の特徴」と「曲の雰囲気と感じたこと」を《音楽的な感受》に基づき整理させたが、多くの生徒が曲の特徴を的確に捉えることができていた。

第7時の後半に各自『惑星』の中から1曲選んで、その魅力を伝える文章を書き、それをもとにこの題材で2度目のプレゼンテーションを行った。全曲の鑑賞を通して、それぞれが気付いたことや感じたことをお互いに伝え合おうとする意欲が伝わってくる発表が多く見られた。提出されたワークシートには、その曲の魅力を自分が学んだ客観的な根拠を基に他者に伝えようとする文章（例1）が多く見られるようになり、前回よりも更に学びが深まったことを感じた。

（例1）曲名 金星

やわらかな光が差し込んで水面がきらきらと輝いている様子を連想させてくれる一曲。ゆったりとしたテンポで静かに奏でられるメロディーは神々しさと独特の緊張感を含んでいます。振動する弦の様子がリアルに感じられる金星はとても魅力的です。

各自のプレゼンテーションを受け、次にグループでプレゼンテーションする曲を一曲選択するようにした。各グループの意向を尊重することが大切だと思っていたので、自由に選択できるようにした。ワークシートに選択の理由を記入させたが、生徒同士での話し合いを通して、きちんと曲の特徴をつかんだものが多く（例2）、この鑑賞の学習が創造的に発展し始めていることを実感できた。

（例2）曲名 海王星 選んだ理由

幻想的な感じで、惑星の魅力や不思議なイメージを表現していて良いと思ったから。ラストの方で女声コーラスが出てくるのが他の曲を比べて大きく異なる点で、めずらしく面白いと思ったから。

第8・9時は、各グループに選択した曲をオーケストラの楽器の音色の特徴や表現上の効果と関連付けながら分析し、よさや美しさを伝えるプレゼンテーションを考える学習をした。

ワークシート(図7)で持ち時間、考える手順について確認し、内容と役割分担の大切さを押さえてからグループ活動とした。各グループに準備されたCDとプレーヤーを使って、音楽的な知覚に関わる客観的な根拠をスコアを基に調べ、実際に曲を聴いて確認する。あるいはその逆の作業を熱心に繰り返し、音楽と主体的に関わる「深い学び」をする生徒の姿が多く見られた(図8)。

音楽1 1年組 番 名前

音楽の魅力や言葉で伝えよう。
～組曲「惑星」の良さを紹介するプレゼンテーションをしてください～

音楽の魅力を伝えながら曲を聴き、どのようなイメージをもち、どこに魅力を感じたかなどを文章にまとめて人に伝えてみましょう。単なる感想を述べるだけでなく、音楽を聴いて感じる音楽の魅力を伝え、スコアで確認するなどして音楽に関する知識や理解に結びつける理由や根拠を示すことが大切です。
また、作品の題名、時代的な背景を調べることも、その曲の魅力を伝える手がかりとなります。

グループ名
メンバー

♪ 発表日 ♪ 11月16日(木)

1 持ち時間は5分程度
2 必ず全員が何かを伝えること
3 CDやピアノを使って音を出しても良い。

STEP1 選んだ曲を確認しよう。

組曲『惑星』より「火星 戦争の神」
曲名 英語 Mars, the bringer of war 日本語 火星 戦争の神
選曲の理由 戦うにふさわしい、偉大で強い曲で、その高揚感と激しい音が素晴らしい。
作曲家 ホルスト Gustav Holst (1874～1934) 英

STEP2 プレゼンで伝えることを具体的に決めるよう。

○ 曲題について
○ 曲名における配置
○ 使われている楽器とその効果について
○ リズムが気になったポイント

STEP3 実際のプレゼン内容(方法・手順など)を決めるよう。

2	内容(方法・手順など)	担当者
1	曲題について	
2	組曲における配置	
3	使われている楽器とその効果について	
4	リズムが気になったポイント	
5		

STEP4 自分の担当する部分を準備しよう。

全体を通してテンパこと、強運の曲の部分を演奏する
ホルストは、4分の4拍子の強いリズムを特徴的に持つ
進めるとして、火星の星のイメージを表現している
導入部分では、弱い音の中に、ピアノが響き、その後でフルートとホルンの2重の音が加わり、その後の曲の動きを予想させ、第一主題が現れる。
曲が流れるにつれて、リズムは高揚感を帯び、切迫したように、音をバグパイプやホルンなどの楽器で演奏する。
最後にはホルンとトランペットの響きに、第三主題が響き、このときに入力され、強いに響き、ホルンとフルートによる、おどろきの音楽を演奏する。

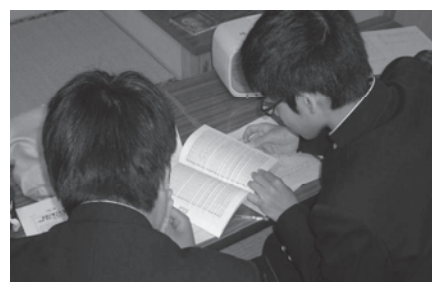


図8 楽曲分析中



図9 発表の様子

図7 ワークシート 生徒の記述したもの

第10時は、各グループが5分程度のプレゼンテーションをする発表会を行った(図9)。プレゼンテーションソフトのスライドは使用せず、必要ならばピアノ等の楽器とCDを使って発表することとした。どのグループもスコアで確認するなどして、選択した曲の音楽の特徴をよく捉え、曲のよさや美しさについて根拠をもって言葉で表現し、他者に伝えることが実践されており、深い学びができていた。また、ピアノで主題を弾いたり、CDを流したりするだけでなくリズムを口ずさんだりしながら説明するグループもあった。作品に対する自分の思いを自分なりの言葉で表現できている生徒が多く感心させられた。

発表者の態度も聞き手のマナーも素晴らしく立派な発表会にすることができた。また他のグループの発表を聴いて、その曲に関心をもつなど、この学習から学びとったことをお互いに共有・共感して、主体的に音楽と関わろうとする姿も見られた。

5 更なる改善に向けて

(1) 成果

- 題材の導入に表現活動を位置付けたことによって、生徒たちは、リコーダー・アンサンブルの豊かな表現の広がりを楽しみながら、見通しをもって《木星》への音楽的な理解を深め、オーケストラの豊かな響きを味わう学習に主体的に取り組んでいた。また、表現の工夫について考える場面を複数設定したことで、自らの学びを振り返り、従来よりも豊かで創造的な音楽活動へと発展させることができた。
- グループ活動を鑑賞の学習に取り入れたことで、他者との様々な関わりから疑問や課題を解決することができた。自分の思いや意図をより明確に自覚し、お互いに創造的な鑑賞の能力を高める学習が実現したことで、生き生きと活動する生徒の姿を見ることができた。
- 題材の中に、3回のプレゼンテーションを組み込んだことで、音楽のよさや美しさを根拠をもって批評するという創造的な鑑賞の能力の高まりを確認することができた。3回目のグループでのプレゼンテーションでは、批評するための客観的な根拠を得るために一人一人が「音楽的な見方・考え方」を働かせて音楽と関わる「深い学び」をする姿を見ることができた。

(2) 課題

- 第3時に実施した学習の定着度を知るための自己評価の結果では、対象生徒51人中18人が「音を聴いて何の楽器かほぼわかるようになった」と回答したのに対し、「楽器名はわかるが、音はあまりわからない」が29人と大きく上回り、十分に満足できる結果ではなかった。使用教材を検討するなど改善の余地が残った。
- グループ学習での学びは、グループ内では共有・共感することが十分にできていたと感じるが、クラス全体まで広げることが十分ではなかった。特に、最後のプレゼンテーション後の各自のワークシートの記述などを生徒の学びに生かしきれなかった。
- この事例ではオーケストラの豊かな響きを味わいながら、音楽的な感受に基づいた楽曲分析によるプレゼンテーションを目指した。前述のように、スライド等は使用せずに、スコアを基に調べて実際に曲を聴いて確認するという作業を中心に行ったが、分析に使用する資料にはインターネットによる情報も含めて様々な物があり、十分に深めることができなかった。今回のような活動は、題材の目標、生徒の状況等をよく検討してから実施すべきであると感じた。

(3) まとめ

今回の「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業の実践により、生徒の側から学びの過程を考えることで、日頃の授業を見つめ直すことができた。これまでも個々の生徒の興味・関心を尊重し、様々な学習活動への主体的な関わりを大切にしてきたが、「音楽」の有する豊富な教材と多様な形態の学習活動には、創造的な表現や鑑賞の能力を育成する更なる可能性が多く存在することを改めて感じた。

〔参考文献〕

- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 芸術編』（平成21年）
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター
『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 芸術〔音楽〕】』（平成24年）
- ・『最新 名曲解説全集 6 管弦楽曲Ⅲ』（音楽之友社）
- ・ミニチュアスコア『ホルスト組曲「惑星」』（音楽之友社）
- ・野本由紀夫監修『NHKクラシックミステリー 名曲探偵アマデウス』（ナツメ社）
- ・野本由紀夫『クラシック名曲のワケ 音楽授業に生かすアナリーゼ』（音楽之友社）

事例2 ポスターの構想・設計から生徒の思考力を高める ～ 美術における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた工夫 ～	
題材名	ポスターで伝える
これまでの課題	ポスターを題材にして授業をするときには、個人のデザイン感覚（レイアウトや色使いなど）を磨くだけでなく、制作の過程においてテーマと深く向き合い、しっかりと構想を練って、できるだけ多くの図案を考えてほしいと考えている。しかし、時間配分的に難しいこともあり、柔軟な思考力が鍛えられないまま、技術的な指導を中心に進めてしまうことがある。そのため、生徒によっては、構図や色彩計画で深く考えないまま制作に向かったり、安易に他のまねをしたりして、結果的にポスターを通して学ぶ内容が浅いものになってしまうことがあった。
授業改善のポイント	本事例では、ポスターの構想を個人で考えた上で、それぞれの意見を出し合いながら、ポスターをグループで制作するという授業展開にすることで、主体的・対話的で深い学びを目指した。 図案や配色についての個人の考えを発展させ、グループの作品として深化していく。その過程で、個々の発想力や柔軟な思考力がグループの作品につながるという見通しをもたせるとともに、振り返って個人のアイデアを磨くという主体的な学びができるように工夫した。また、それぞれの生徒が、安易に制作を進めるのではなく、他人の意見に耳を傾けながら制作していくことで対話的な学びにつなげ、グループで協力しながらアイデアを熟成してポスターの効果や役割について深く考えていくようにすることで深い学びになると考えた。

1 指導観

(1) 本題材について（教材観）

ポスターは、インターネットによる情報や映像メディアがあふれる現代社会においても、視覚的な訴求効果の大きさという点では欠かせない情報伝達媒体である。例えば、ポスターは1枚の紙が掲示されただけで、情報を必要としている人に限らず、不特定多数の人の視覚に訴える効果がある。そのことだけでも情報の伝達効果が高い媒体であると言えるだろう。また、ポスターによっては、描かれた中身（イラストや写真）やデザイン性の高さからコレクションされるものもあり、そこには芸術的な価値も存在する。

ポスターは古くから美術の授業において題材とされてきた。その際、ポスターの役割を学習し、視覚的效果を高めるデザインとしての造形要素を理解しながら独創性のある表現ができることが大切とされている。

(2) 生徒の実態（生徒観）

絵を描くことに興味関心があり、課題に対して熱心に取り組む生徒が多い。また、感受性に富み、他人の気持ちを推し量りながら気遣いのできる集団である。しかし、学習に取り組む姿勢では、他教科の課題に比べて、美術の課題は安易に済ませようとする傾向も感じられる。深く思考して、アイデアを熟成させながら作品を制作していく楽しさや充実感、達成感を十分に味わっていないのではないかとと思われる場合がある。また、自分の考えを整理した上で他人にわかりやすく伝えることが上手くできない場面も見られる。

美術の授業に取り組むための技術面においては、豊かな表現力をもちながら、アイデアを具現化して形にしていくことを苦手としたり、絵の具や筆の使い方が十分に身に付いていないのに現状で満足していたりして、発展的な表現の工夫をしていく意欲に欠けている生徒もいる。

(3) 生徒に身に付けさせる力（育成を目指す資質・能力）

生徒たちがこれから生きていく社会は、グローバル化に対応した多様な価値観とコミュニケーション能力が求められる。そこで、自分自身の考え方や意見をしっかりとった上で他人の意見に耳を傾け、さまざまな課題に積極的に取り組みながら新たな価値を創造できる力が必要になる。

少子化などの社会問題の影響もあって、現代の高校生には、自分の意見に自信がもてずに、つい他人任せになりがちになる傾向や、自分に関係の無いことには無関心になりがち傾向がある。だからこそ、柔軟な発想で問題意識をもって、主体的に課題に取り組む姿勢を身に付けてもらいたいと考えた。

このような考えから、次の5点を今回のポスターの課題で身に付けさせる力とする。

- ・個人のアイデアを出し合い、他者の意見と自分の意見の良いところに気付いて、グループで意見をまとめる力
- ・ポスターの造形要素を深く探究し、構想を深めて発展させる力
- ・伝達デザインとしてのポスターにとって効果的な図案と配色を工夫する力
- ・文字とイラストの美しい配置について理解し、見通しを立てながら効果的に表現する力
- ・日常生活における美術文化としてのポスターの意義を見いだす力

2 題材の指導計画及び評価計画

○題材の評価規準

美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
①ポスターに関心を持ち、グラフィックデザインの美しさや楽しさを意識している。 ②日常生活における美術文化としてのポスターの意義を見いだそうとしている。	①伝えたいイメージを端的に伝える造形要素を考えている。 ②イメージを高める効果について話し合いながら創造的な表現の構想を練っている。 ③ポスターのテーマについて他者の考えと自分の考えをまとめて制作の構想を発展させている。	①文字やイラストが目的や意図に応じて効果的なメッセージとなるように制作している。 ②制作過程を総合的に考え、見通しを立てながら主体的に制作している。	①ポスターの役割を学習し、伝達デザインの効果を理解している。 ②さまざまなポスターのデザイン性を読み取り、表現の意図を理解している。

○題材の指導及び評価計画（総時数14時間）

時	学 習 内 容	評価の観点				評 価 規 準	評価方法
		関	想	技	鑑		
1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	○ポスターの役割について学習する。 ○参考作品を鑑賞し、効果的な伝達デザインの構成について考える。 ○ポスターのデザイン性について考えながらアイデアスケッチをする。 ○テーマに沿ったイメージを効果的に伝えるデザイン要素を考える。 ○ミルククッキーのポスターの構図を考える。 (主体的な学び)	①				○ポスターに関心をもち、グラフィックデザインの美しさや楽しさを意識している。 ○ポスターの役割を学習し、伝達デザインの効果を理解している。	授業観察 ワークシート 授業観察 鑑賞の様子 アイデアスケッチ
5 ・ 6	○個人のアイデアを持ち寄り、グループで話し合い、それぞれの良いところを生かしながら共同制作のポスター図案を決める。 ○グループとしてのアイデアスケッチを意見を出し合いながら描く。 (対話的な学び) (深い学び)			①		○文字やイラストが目的や意図にちよびて効果的なメッセージとなるように制作している。	発言内容 授業観察
7 ・ 8 (本時) ・ 9 ・ 10	○配色の視覚的効果と色調の学習をした上、グループで決定した下絵をコピーして個人で色彩計画をする。 ○個人の色彩計画を持ち寄り、一人一人の考えを聞いてグループとして色彩計画をする。 (対話的な学び) (深い学び) ○グループで図案と色彩計画を再検討して、意見交換をしながら水張りしたパネルに下絵を描いていく。		②			○イメージを高める効果について話し合いながら創造的な表現の構想を練っている。 ○ポスターのテーマについて他者の考えと自分の考えを展まさせている。	発言内容 授業観察 ワークシート 授業観察 制作途中の作品
11 ・ 12 ・ 13	○制作過程を総合的に考え、見通しを立てながら協力して制作する。 ○伝えたいイメージを確認しながら制作する。 (主体的な学び) (深い学び)			②		○制作過程を総合的に考え、見通しを立てながら主体的に制作している。	授業観察 制作途中の作品
14	○各グループのポスターを美術的な観点で分析しプリントにまとめる。				②	○さまざまなポスターのデザイン性を読み取り、表現の意図を理解している。 ○日常生活における美術文化としてのポスターの意義を見いだそうとしている。	ワークシート 発言内容

本事例では、ミルククッキーをPRするポスターの制作を課題として設定し、会社の「企画会議」の要領で、テーマのイメージや制作方針についての意見を出し合いながらポスターを共同制作していく。本時は、14時間のうちの8時間目にあたり、下絵を元に、グループで色彩計画を立てる。

本時の指導のポイントは、一人一人が他者の意見を聞き入れて、かつ、自分の意見を伝えながら

テーマのイメージに合ったポスターが制作できるよう活発な対話が成立するように促すことである。その際、グループ活動の中で生徒たち自身の力で改善点に気付いた場合は、大いに褒めることで、生徒たちが面倒がらずに意欲的にやり直せるように配慮した。

3 本時の展開 (14時間のうちの8時間目)

段階	学習活動	指導上の留意点	評価規準 (方法)
導入 5分	・ 前時の内容を確認し、本時の目標と内容を理解する。	・ 本時の内容が本制作に大きく影響していくことを理解させる。	
展開 35分	・ 自分の色彩計画案がテーマのイメージに合った色使いになっているか確認する。(ワークシートに記入) ・ グループごとに分かれて、各自の色彩計画案を出し合う。 ・ 基本的な配色を踏まえて順序立てて考えていく。 ・ それぞれの意見から共通点や相違点を見つけてポスターの目的や伝えたい内容を基に表現意図に合った色彩計画を考える。 ・ 配色カードを使って色のトーンの調整をする。 ・ 下絵に着色していく。 ・ グループごとに、決定した色彩計画について意見を発表する。	・ 制作するポスターのテーマのイメージを言葉にして確認させる。 ・ 色彩計画について理由を説明しながら意見が言えるような環境作りをする。(司会の選定、色彩のポイントなどの助言) ・ 基本の配色で考えさせる。 ・ 他のアイデアと、自分のアイデアの良いところを見つけながら話し合うように助言する。 ・ 配色カードの使い方を助言し、色の調子や組み合わせを考えさせる。 ・ 決定した配色の理由をわかりやすく説明できるよう検討させる。	○イメージを高める効果について話し合いながら創造的な表現の構想を練っている。 【発想や構想の能力】 (発言内容) (授業観察) (ワークシート)
まとめ 5分	・ 基本的な配色で制作されたポスターを参考にして自分たちのポスターの視覚的な効果について考えて本制作の見通しを立てる。	・ 配色の効果を理解し、自分たちのポスターの色彩計画をグループ内で共有させる。	

(※本校では45分授業を実施している。)

4 実践の様子

(1) 個人でアイデアを考える (主体的な学び)

テーマに沿って、ポスターの図案として使う素材を見つける(図1)。グループでの検討においては、一人一人ができるだけ多くの素材を見つけることが大切であると考えられるが、自分で素材を一つに絞ってしまう生徒も見られたので、まずは自分が思いついたアイデアを全て書き留めておくなどして、グループでの話合いに生かすように助言した。



図1 個人でアイデアを考える

(2) 図案についてグループで話し合う (対話的な学び)

個人のアイデアを持ち寄って、ポスターの図案をどのようにしていくかについてグループで話し合った。このとき、話合いで出された意見に基づいて、個人のアイデアスケッチを手直しする作業が、教師の指示が無くても行われた。対話の中から個々の生徒が自分のアイデアを修正して新たなものを創り出していくという姿から、対話的な学びを通して主体的な学び、深い学びが実現している様子が見えがえた(図2・図3)。



図2 図案を話し合う



図3 アイデアを修正する

グループでポスターのイメージをどうするかを話し合い、図案を決定していく場面で、誰かのアイデアをそのまま採用するのではなく、それぞれが持ち寄ったアイデアを参考にして新たにグループとしての図案を考え出すようにした。

一例を挙げると、個人のアイデア(図4)ではおばあちゃんが子どもとクッキーを作る場面になっていたが、グループで話し合いを進める中で、「できたてのクッキーを描いた方が美味しそう」なイメージが伝わり、「一生忘れられないつかしの味」という意見が出されて、オープンの中から見た構図の図案(図5)に変化していった。このように個人制作だけでは到達できなかったと考えられる例も見られた。



図4 個人のアイデア



図5 グループで話し合っ
たアイデア

(3) 個人で色彩計画を立てる

グループで図案を決定した後で、もう一度個人作業に戻り、一人一人で自分たちのポスターの色彩計画を立てた。このとき、色彩の視覚的効果についてのプリントを用意して、配色の基本や色調について説明した。

(4) 色彩計画についてグループで話し合う (対話的な学び)

図案の計画と同じように、個人のアイデアを持ち寄って グループで話し合いながら色彩計画を考えた (図6・図7)。しかし、図案が決定したことにより色彩計画に大きな違いが見られないグループがあったので、固定観念にとらわれることなくイメージカラーを考えていくように助言した。



図6 一つの図案に複数の色彩計画を立てた



図7 色彩について話し合う

(5) 図案と色彩計画を決定し、作品を制作する (深い学び)

できあがりイメージして、制作過程を総合的に考えながら進められるようにグループ内で役割分担をさせ、誰か一人に任せきりの状況にならないよう配慮した。

制作は、B3判のパネルに画用紙を水張りしたものをベースにして、そこに、図案に応じて別の画用紙で作ったパーツを貼り付けていく方法をとった。そうすることで、役割を決めて見通しをもちながら協力し合うことができる。制作の過程の中で、細かなパーツの作り方や色使いの微調整などを話し合ったり、二人で同じ画面を描く場合には線の雰囲気を合わせたりする必要があり、主体的に対話を進めながら解決していく様子が見られた (図8・図9)。中には、色彩について意見を出し合ううちに、図案の検討に戻って考え直すグループもあった (図10・図11)。

ポスターの効果について深く考え、アイデアを少しずつ広げていく作業は、個人制作だけではなかなか到達できないものと考えられる。



図8 パーツを作る生徒



図9 線を描く生徒

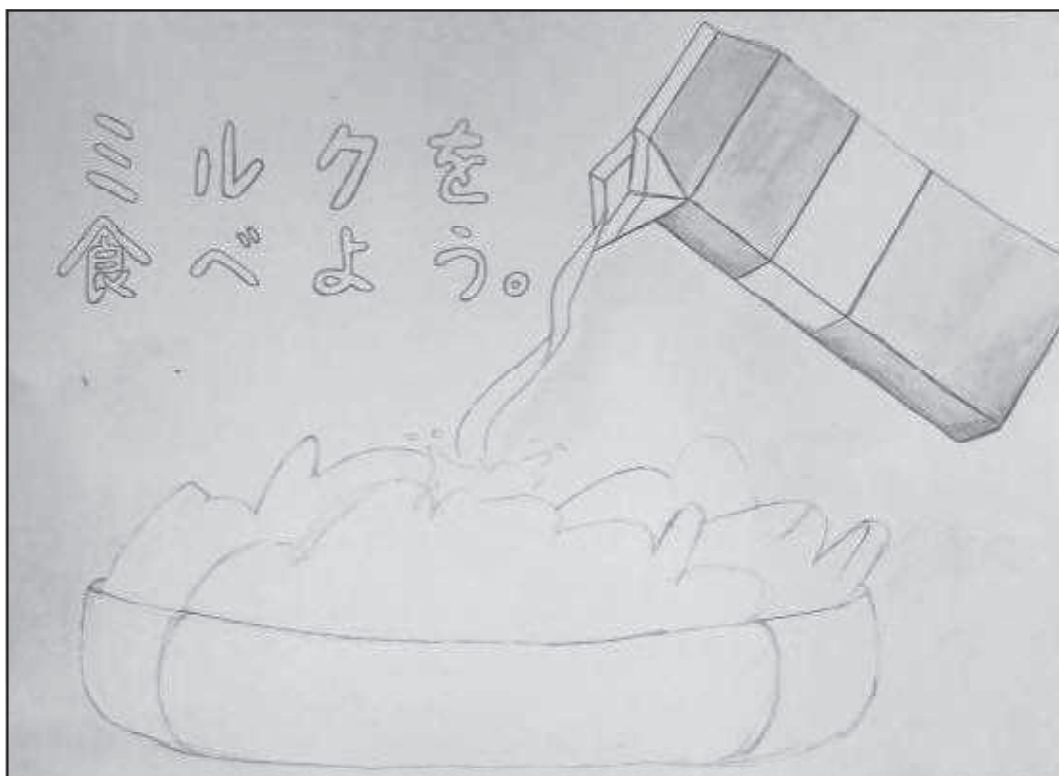


図10 修正前の図案

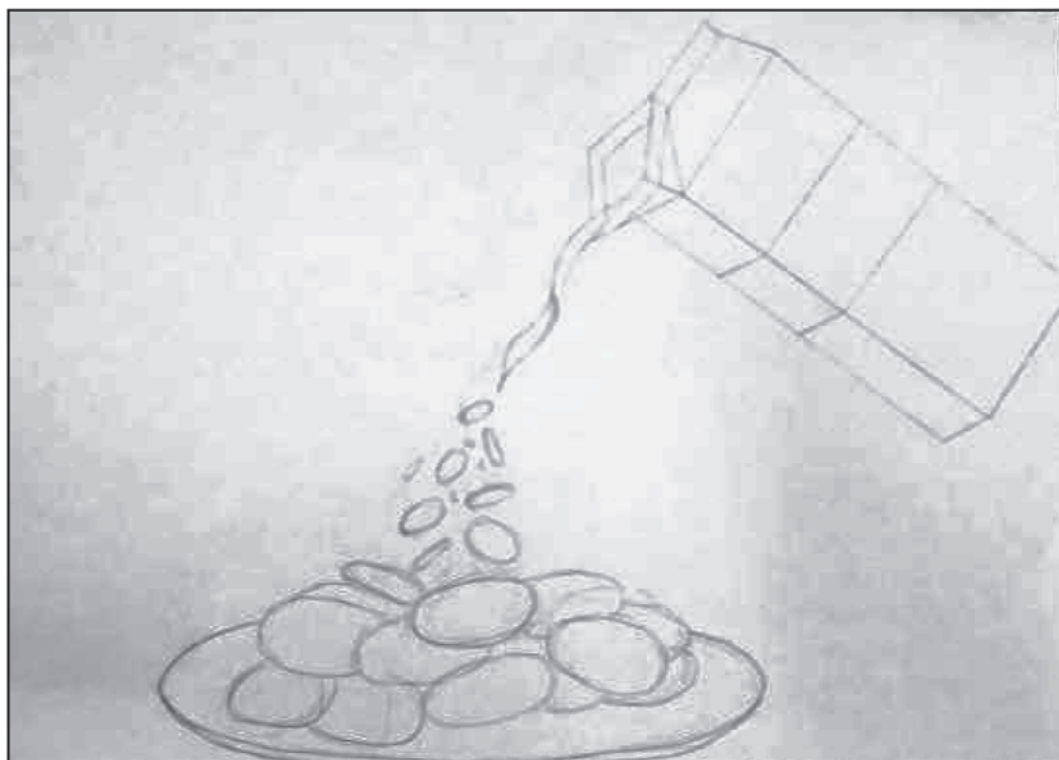


図11 修正後の図案

図案が決定して、一度は色彩の検討に取りかかった（図10）が、「ミルクの色をクッキーの色に徐々に変化させるとよい」という意見が出されて、図案自体も牛乳からクッキーに徐々に変化させるようにした（図11）。

5 更なる改善に向けて

今回の実践では、個人の意見や考えを出し合いながらグループで一つの作品を制作していく学習活動の中で、生徒が主体的・対話的で深い学びができるようにするにはどうしたらよいのかを探った。その成果と課題を以下にまとめる。

(1) 成果

生徒の作品を見ると、ポスターとして効果的なデザインとなる要素が多く見られ、対話的な学びを通して、主体的な学びや深い学びが実現できたものと考えられる。

例えば、画面の構図を決める場面では、グループでの話し合いを通して、個人のアイデアでは思いつくことが難しいと思えるような構図に気付くケースが見られた。また、色彩計画を立てる場面では、色彩について考えているうちに、図案自体を変更した方が良いといった意見が出されて、再検討して改善していくようなグループもあった。最終的に作品を仕上げていく場面では、一人一人が役割分担をしてそれぞれに責任をもちながら作業をすることで、主体的に取り組むことができた。また、自らの課題と捉えることにより、ポスターのデザイン性や表現についての理解が深まったと考えられる。

また、ワークシート（図12）を活用することにより、作業ごとの振り返りを効果的に行うことができ、制作の意図や学習の成果を明確化することができた。

(2) 課題

生徒一人一人の思考力を育むために、個人としての発想や構想を生かしながらグループでポスターの役割や効果について考えさせる授業に取り組んだ。既に報告したように、本事例では一定の成果があった一方で、他の生徒の意見に頼り切りになってしまう生徒も見られた。指導の方法に一層の工夫を重ねる必要がある。また、単純にグループ活動や共同制作をするだけでなく、一人一人の学びとして成果が上げられるような工夫が必要だと思った。

主体的・対話的で深い学びの実現には、教師の関わり方の加減が大きく影響する。したがって、教師は題材の設定、指導の手順を常に研究していかなければならないと改めて感じた。

今回の授業実践で、個々の生徒たちが発想や構想の力を十分に発揮できたのかについては、更に調査、分析が必要であり、問題点を把握する必要があると考える。ミルククッキーをテーマにした作品制作では、牛や牛乳が素材としてすぐに思いつくのだが、例えば、ロボットがクッキーを食べたがっている様子など、視点を変えればアイデアの素材となるものは無限に存在しているはずである。生徒たちが、主体的に課題の楽しさを感じ取り、美術的思考を深めていけるような指導を目指して、今後の授業改善につなげていきたい。

ポスターの制作 ～学習のまとめ～

／年 組 氏名

下絵の構想

どのようなイメージで制作しようと考えたのか

自分の考え、ねらい	グループの考え、ねらい
見た人にクッキーの味やメッセージが伝わるように、人物の表情を工夫し、キャッチコピーを考えた。	オープンから見た視点でメインのクッキーを大きくかき、おばあちゃんと子どものおたかかいふんいきを出せるようにした。

色彩計画

どのようなイメージで制作しようと考えたのか

自分の考え、ねらい	グループの考え、ねらい
おばあちゃんと女の子の髪の色や目の色など、色の組み合わせを工夫した。トーンや暖かいふんいきが伝わるような暖色系を使った。	オープンから見た様子が伝わるよう影をつけたり、遠近法を使ったり色の濃淡に気を付けた。

感想

それぞれのポスターの良い点はどこ

自分たちの作品	他のグループの作品
絵だけでなくキャッチコピーを使ってクッキーのイメージを伝わりやすかった。	色の配色が工夫されており見やすい。文字に影をつけていて文字が目につきやすく分かりやすい。

共同制作によって気づいたこと、学んだことを箇条書きにしてみよう

- クッキーのイメージは人によって様々な伝え方があった。
- 色の配色や文字の配置を工夫することで伝わる感じも変わることを知った。
-
-

図12 ワークシートの記述例

〔参考文献等〕

- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 芸術編』（平成21年）
- ・宮脇 理 監修『ベーシック造形技法』（建帛社）
- ・東京商工会議所編『カラーコーディネーションの基礎』（中央経済社）
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター
『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 芸術〔美術〕】』（平成24年）

事例3 深い学びを目指した臨書学習 ～ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた工夫 ～	
単元名	行書の古典に学ぼう 「風信帖」
これまでの課題	書道における古典の鑑賞の授業では、生徒が感じたことを自由に発表させ、他者と共有し、共感へとつなげる時間をもつことがある。しかし臨書学習の授業においては、指導者が筆遣いなどの技術面を一方的に説明することが多く、生徒が主体的に考えながら臨書し、表現の工夫をするところまでには至らなかった。
授業改善のポイント	臨書学習の中で、指導者からの一方的な技術説明ではなく、古典からとられた籠字の形から、どのような筆遣いをしたのかを考え、グループで意見交換をしながら解決する方法を見いだすようにすることにより、主体的・対話的な学びを目指した。また、これらを通して想像力を養い、発想力を豊かにするとともに、これまで以上に、意識的に用筆法を駆使して運筆することで一人一人の高い技能習得に結び付ける深い学びが展開できるのではないかと考えた。

1 指導観

(1) 本題材について（教材観）

空海は日本を代表する能書であり、嵯峨天皇、橘逸成とともに平安の三筆と称される。その空海の書の中でも、第一の名品と言われる風信帖は、王羲之の書風に加えて顔真卿の影響も見られる。その二人の作品と比較するなどして鑑賞眼を養うとともに、肉筆による墨色の変化や墨の潤濁、運筆の緩急や紙面構成の妙などを感性を働かせて感じることで、拓本などでは味わうことのできない書表現の幅広さを理解できるようにする。さらに、国宝である風信帖が書の名品であるということを理解するだけでなく、平安時代に書かれた手紙であることやその時代の背景を知ることによって、書の新たな側面を見いだすことにもつながる。

(2) 生徒の実態（生徒観）

明るく、何事にもまじめに取り組む生徒が多い。毎回の課題にも熱心に取り組む、完成度、提出状況共に良好である。書写には苦手意識をもっている生徒もいたが、高校書道は「上手い、下手」だけではないと意識付けをしたことにより、徐々に書道に興味・関心を示す生徒も増えている。しかし、発想力や、表現力に自信がもてず、自由意見や感想を求めても通り一遍の意見が多く、やや物足りなさを感じることもある。

(3) 生徒に身に付けさせる力（育成を目指す資質・能力）

- ・ 古典臨書をする上で、作品全体の書風を感じながら分析的に鑑賞し、自らの意図に基づいて構想し、表現を工夫する力。
- ・ 効果的な表現の技能を身に付け、創造的な表現をする力。
- ・ 歴史と関連付けるなどして、古典の知識を幅広く身に付ける力。

2 単元の指導計画及び評価計画

○単元の評価規準

書への関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能	鑑賞の能力
①古典の美を味わい、 見ることを楽しむこ とで書への関心を高 め、意欲的に学習に 取り組もうとしてい る。 ②他者の意見等を参考 にしながら書表現に ついて追究しようと している。	①自らの意図に基づい て線質や用筆の特徴 を生かした表現を工 夫している。	①点画や線質の特徴を 捉え、その用筆・運 筆の方法を考察して 臨書している。 ②創造的な書表現をす るために、古典の線 質や字形などの表現 の技能を身に付けて いる。	①風信帖の美とその技 法について理解し味 わっている。

○単元の指導計画と評価計画（総時数6時間）

時	学 習 内 容	評価の観点				評 価 規 準	評価方法
		関	想	技	鑑		
1	○空海とその時代背景、風信帖の内容や成立を知る。	①				○古典の美を味わい、見ることを楽しむことで書への関心を高め、意欲的に学習に取り組もうとしている。	ワークシート
2	○風信帖の美を、王羲之・顔真卿それぞれの美と比較しながら鑑賞する。 〈グループ活動〉				①	○風信帖の美とその技法について理解し味わっている。	行動観察
3	○「風信」部分を籠字から分析し筆遣いを工夫しながら臨書する。 （主体的な学び）			①		○点画や線質の特徴を捉え、その用筆・運筆の方法を考察して臨書している。	作品
4・5 （本時）	○個人の分析を持ち寄り、グループで意見交換する。	②				○他者の意見等を参考にしながら書表現について追究しようとしている。	行動観察
	○様々な意見を基に用筆法についてグループで意見をまとめ考察し臨書する。 （対話的な学び） （深い学び）			②		○創造的な書表現をするために、古典の線質や字形などの表現の技能を身に付けている。	プリント 作品
6	○「雲書」部分の臨書から連綿を知り、流れるような行書の表現を工夫する。		①			○自らの意図に基づいて線質や用筆の特徴を生かした表現を工夫している。	作品

3 本時の展開 (6時間のうちの5時間目)

段階	学習活動	指導上の留意点	評価規準 (方法)
導入 (5分)	・ 前時までの内容を確認し、本時の目標と内容を理解する。	・ 簡単な質問をし、内容を想起させる。 ・ 本時は個人の意見を基にグループごとにまとめ、筆遣いを自分たちで考え臨書するということを理解させる。	
展開 (30分)	・ 個人の分析を基に「風信」の臨書をする。 ・ 各自の分析をグループ内で発表し、意見交換をする。 ・ 出されたそれぞれの意見（共通点や相違点）を基に更に考察を深める。籠字から、どのような筆遣いで書かれているかを試し書きなどをしながら検証し、意見の共有をして発想を広げていく。 ・ 話合いの結果を籠字プリントにまとめる。 (筆の動きがわかるように、言葉や図で) ・ グループ内で結論に至ったら互いに筆遣いを確認しながら臨書作品を制作する。	・ 自分の分析を基に筆遣いや形に留意しながら臨書させる。(捨てずに①と書いて保管させる。) ・ 他人の分析に耳を傾け話合いに積極的に参加するよう促す。 ・ 机間指導をして、どのような話合いが行われているかを把握する。 ・ 実際に筆を執り、書きながら考えを深めていくように促す。 ・ いい意見があれば適宜全体にも共有させる。 ・ できる生徒はグループ内でできない生徒に書き方を見せたり教えたりするよう指示する。	○他者の意見等を参考にしながら書表現について追究しようとしている。 【書への関心・意欲・態度】 (行動観察) ○創造的な書表現をするために、古典の線質や字形などの表現の技能を身に付けている。 【創造的な書表現の技能】 (籠字プリント) (臨書作品)
まとめ (10分)	・ できあがった作品を見せ合い互評しあう。 ・ グループでプリントに感想をまとめる。	・ 本時の内容を振り返り自己の変容を感じ取るように促す。 ・ 次回の予告をする。 「雲書」部分の臨書	

(※本校では45分授業を実施している。)

4 実践の様子

(1) 第1・2時の学習

ア 作者や作品について成立や時代背景を知る

「風信帖」は書道Ⅰにおいて初めて目にするであろう日本の古典である。単元の冒頭で、平安時代や空海について、教科書以外からもエピソードやことわざを紹介して、本題材に対する興味関心をより高めるようにした。空海については中学時代に学習しているが、深く日本史と関連付けることで生徒の学習意欲が増したようだった。また、「風信帖」は空海が最澄に宛てた手紙であるが、教科書に書かれている直訳から、内容を更にかみ砕いて意識させることにより、深い鑑賞につなげて、国宝である本作品への親しみをもたせることができた。

イ 王羲之・顔真卿の書風と比較する

遣唐使団と共に唐に渡って仏教を学んだ空海は、書についても多くのことを学んで帰国した。王羲之の書を学んだのはもちろんであるが、特に顔真卿の書にも多大な影響を受けたと言われている。そこで、「風信帖」の中から王羲之と顔真卿の影響を受けたのではないかとと思われる表現を見つけ出すようにした。それぞれの書風が感じられる箇所を指摘し合い、グループ内で意見を共有した。意見には根拠を示すようにしたが、賛否の分かれるところもあり、より細かい分析をしながら鑑賞している様子うかがえた（図1）。



図1 書風の分析

○王羲之・・・起筆、収筆の流れがよく気脈が明確で流暢さが感じられる

風信帖に見られる王羲之風の文字の例： 書、之、雲、霧、兼、供、養、不、能、山*

○顔真卿・・・線が太くどっしりと重厚で力強い

風信帖に見られる顔真卿風の文字の例： 風、雲、恵、止、頂、法、思、及、山*

※「山」という文字は意見が二つに分かれた。

様々な感性を働かせて風信帖を味わう鑑賞の取組となった。

(2) 第3・4・5時の学習

ア 個人で分析して臨書する

風信帖の冒頭部分を臨書する（図2）。一字目の「風」は前時の鑑賞で指摘があったように、少し顔真卿の書風が感じられる力強く楷書に近い行書である。二字目の「信」は草書であり、究極にくずされていて、柔らかい。これら是对照的な二文字だが、形や線質をよく見て臨書するよう促した。特に「風」の一画目、二画目のはねの角度、「信」の二、三画目の点の形、四画目の入筆の角度に着目させるようにした。



図2 個別に臨書する様子

イ グループで分析して用筆法を見いだす (対話的な学び) (深い学び)

グループを作って、各個人で行った分析についての意見交換をした。「風信」の部分の籠字を印刷したプリントを用いて、文字の外形に着目し、入筆角度、線の太細、運筆を細かく分析するように促した。ここではあらかじめ行った個人の分析結果の差が大きく、しっかり細かいところまで見いだした生徒と、そうではない生徒がいた。しかし、自分では用筆法などを気付けなかった生徒も他の人の意見を聞いているうちに理解が深まり、活発な意見交換ができていた。少人数で意見を出しやすい雰囲気だったためか、新しい発想と視野を広げることができ、初めての古典の臨書学習に喜びを感じている様子うかがえた(図3・図4・図5)。

次に、出された意見を基に、グループとしての結論を一つにまとめ、籠字プリントに書かせた(図6)。ここでは誰か一人の意見を安易に採用するのではなく、実際に筆を動かし、十分な話し合いにより検証しながら、空海が行ったであろう用筆法を推測するよう促した。



図3 個人の意見を出し合う場面



図4 試し書きで検証する場面



図5 筆を動かして推測する場面

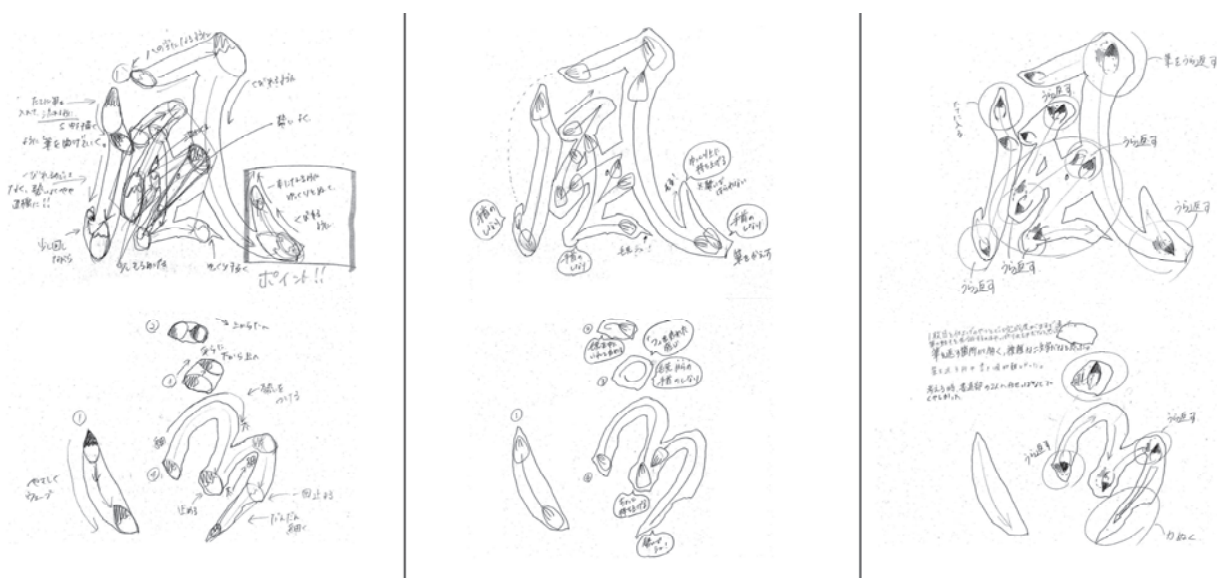


図6 各班でまとめた結論

ウ グループのまとめを基に臨書する (主体的な学び)

試し書きで検証した筆遣いをグループで共有し臨書した。特にリーダーは決めなかったが、筆順ごとに、理想とする運筆のできる生徒が代わる代わる部分的なリーダーになって、書いているところを見せたり教えたりしていた(図7・図8)。メンバーは揮毫者に何度かリクエストして、揮毫の様子を観察し参考にしながら書いていた。見る際には入筆の角度や運筆の速度、筆の弾力の使い方などに着目し、互いに助け合いながら臨書した。



図7 生徒同士で見せている



図8 グループでまとめた結論を基に臨書している

エ できあがった作品を互いに批評する

グループで見いだした用筆法を使って作品を書き上げ、互いにできあがった臨書作品の批評会を行った(グループ内での互評)。

既に何度も話し合いを行っていて、見るべきポイントが共有できていたので、批評はスムーズに行えていた。話し合いをする前に自分一人で臨書した作品と比べて、話し合いの後に清書した作品は完成度の高いものが多く、生徒たち自身も達成感を味わったようであった。中には劇的に上達した生徒も数名いた(図9)。

	生徒1	生徒2	生徒3	生徒4
最初の臨書				
	↓	↓	↓	↓
話し合い後の清書				

※「風」の一画目は班員全員が同じように臨書できた。

図9 話し合いの前後における生徒の臨書作品の比較

(3) 第6時の学習

ア 連綿の技法を知る

風信帖の三字目「雲」と四字目「書」の連綿部分の臨書をする。前時に行った籠字から筆遣いを推測する流れで細部にまで目が行き届き、起筆・収筆の形や角度から、運筆・用筆を自然に見いだして、臨書することができた。生徒が書いた作品と書画カメラで教師が揮毫したものを見せて運筆、筆順、形の比較をするようにしたが、筆順が変わるところがあったにもかかわらず、概ね正しく運筆し臨書することができていた。生徒たちは、経験を積むことで古典から筆遣いを考察する目を養い、自分で気付いて書けたことで自信をもつことができるようになった。

頭の中で書き方がわかったとしても、すぐに筆を使いこなして作品にできるわけではない。しかし今回は、分析的に古典を鑑賞し、その字形から自ら筆遣いを考えて臨書することができた。

また生徒の感想から、「こんな風に（一画一画の運筆を）考えて書くことで筆遣いがよくわかった、自分一人では考えも及ばなかったが話し合いによって答えを導き出せて楽しかった」などの意見が出され、「対話的な学び」を通して「深い学び」につながることができたと考えられる。今後の臨書力、技術力の習得に向けて充実した学びだったと思う。

(4) 今回の学習を通して（生徒の感想）

- 筆づかいの説明を文字でするのは難しく、ポイントや書き方を相手に伝わりやすくするにはどうすれば良いのか考えるのが大変でした。でも、見るだけでは気づくことのできなかった筆づかいや止まり方、太さなどを知ることができたので良い経験になったと思います。これからは、止めはねはもちろん、太さや文字の強弱に気をかけて文字を書いていきたいと思います。
- 臨書することは難しく、文字自体のポイントを見つけなければならないけれど、要点をまとめることで書くときのポイントをおさえることができました。私には見つけられなかったポイントなどがたくさん見つかり、より似ている書を書くことができてよかったです。
- 今回の臨書はいつも以上に筆遣いを気にしたり、強弱を意識したと思います。はねるところが難しかったけど、筆の向きに気を付けて書くようにしました。また、力が入りすぎてしまったところもあるので次に活かしていきたいです。
- 今回の臨書はいつもより丁寧に正確に書くよう心がけました。少し書き方が違ってしまっただけで文字の雰囲気が変わって形が崩れてしまったところもあったので、そこは次回の課題だと思いました。練習を重ねるにつれ、似た文字を書くことができたのでよかったです。
- いつもと違う筆づかいだったので、書くのがむずかしかったです。空海の筆づかいをまねすれば、自分も上手になるかなと思いました。
- 班の皆と考えることで自分一人では思い浮かばなかった考えが分かりました。解説書を書くことで筆づかいがよく分かりました。
- 「手首のスナップ」を使う書き方が多くて、頭では分かっているけど、いざ書くとなると思い通りにならなくて難しかったです。でも、みんなで書き方を研究するのは楽しかったです。
- 普段一人で考えて書いているけど、今回は班のみんなと話し合いをしながら書いたことで、いろんな意見が出て、「風信」の文字にいろんな工夫をしながら書くことができました。

5 更なる改善に向けて

(1) 成果

- 籠字から運筆・用筆法を考えるようにしたことで、古典を分析的に深く鑑賞することができた。また、起筆や収筆の形・角度に、これまでよりも留意することができるようになった。
- グループ活動の中では、対話から様々な発想が生まれることで自己解決力が増し、互いに教え合い、協力することで、いつもの清書よりも完成度の高い作品を制作することができた。

(2) 課題

- グループごとの分析をクラス全体で共有するまでには至らなかった。時間的な問題もあるが、教師が展開を工夫する必要があると思う。
- グループ活動においてはメンバーの構成や雰囲気でも多少の温度差が出てしまうことがあり、分析の深さや作品の完成度に影響した。教師側の配慮や声かけが必要であると感じた。

(3) まとめ

行書の学習は、単に文字のくずし方を学ぶだけではない。楷書と比べて、多様な運筆を用いるため筆遣いをより意識して書くことが必要となる。今回の研究では、筆遣いを教師に教えられるだけでなく、自ら考えて書くことで主体的な臨書学習を行い、今まで以上に、筆遣いを意識して書くことを体験させることができた。

臨書学習では、通常、教師の解説→模範揮毫→練習→添削→作品提出といった流れで進むが、今回の実践は生徒にとっても新鮮な取組になったといえる。しかし主体的に学ばせるためには、用筆法や運筆の指導にどこまで関わるべきかの迷いもあり、数多く出された生徒の意見や気付き全てに反応することができなかった。今後更に指導の手順や展開を研究することで、生徒に学ぶ喜び、書の美しさや楽しさ、自らの表現ができるようになる達成感を味わわせる授業を目指していきたいと改めて思った。

〔参考文献等〕

- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 芸術編』（平成21年）
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター
『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 芸術〔書道〕】』（平成24年）
- ・魚住和晃『「書」の歴史と名作手本』（講談社）
- ・魚住和晃『「日本」書の歴史』（講談社）

育てます
支えます
広げます



栃木県総合教育センター

高等学校における教科指導充実に関する調査研究
高等学校における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて

発 行 平成30年3月
栃木県総合教育センター
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070
URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>

問合せ先 研究調査部
TEL 028-665-7204
FAX 028-665-7303